

<研究ノート>

「ピジン」の語源をめぐって (2)

林 正 寛

II

前回 (『一橋研究』, 第6巻第3号, 1981年, 147-156頁) は, 「ピジン (pidgin)」の語源説のかわきりとして, 南米の北東部に話されていた土着の語 'pidian' に由来するとする, 「ピジャン説」をとりあげた。その際, この説の問題点とともに, その提唱者たちが, 1851年の Berncastle の叙述 (前掲論文, 151頁に引用) にみられる 'pigeon' という語に, この 'pidian' をむすびつけようとしていることをみた。

今回は, その Berncastle の叙述をふまえて, O.E.D. の採用するところとなった, 現在, もっともポピュラーな説 (すなわち, 英語の 'business' に由来するとするもの。「ビジネス説」と呼ぶことにしよう) を主としてとりあげることにする。

では, まず, O.E.D. が 'pidgin' にたいして与えている定義をみることにしよう。

A Chinese corruption of Eng. *business*, used widely for any action, occupation, or affair.

これは, 同時に, 「ビジネス説」の簡にして要をえた定義でもある。そこで, つぎの手順にしたがって, この説を検討してみることにしよう。まず, 「ピジン」は, どのような意味で用いられていたか, つぎに, business から pidgin への音変化は, どのように説明しうるか。これらの問題点を検討するには, 当然, 「ピジン英語」が形成されつつ発展していった時期の, すなわち, 18世紀中葉から19世紀なかばにかけての資料が必要となる。しかし, 残念ながら, それは甚だ少ない。「ピジン英語」というものの性格を考えるなら, 記述資料

が少ないのは、あたりまえではあるのだが。今回利用するのは、主として、本稿の末尾に付した5つの資料である。

### 資料 I.

1833年から1851年にかけて、*The Chinese Repository* という雑誌がカントンで出されていた。その第4巻(1836)に、‘Jargon spoken at Canton. . .’ という、無署名の記事がのっており (pp. 428-435)、中国人の商人と執筆者(イギリス人とおもわれる)が、ピジン英語で、執筆者の表現をかりれば、‘*Canton-English*’ で会話をかわしている例を紹介している。全部で3例あるが、これは、‘pidgeon’ という表現をふくむ、そのうちの1例である。なお、他の2例には、‘pidgeon’ という語はあらわれない。この‘pidgeon’ は、のちに、Berncastle が ‘pigeon’ と綴った語であり、今日の ‘pidgin’ にあたる。

### 資料 II.

これは、資料 I. と同じ雑誌の、第6巻(1837)に掲載された、‘*Gaoumun fan yu tsä tsze tesuen taou, . . .*’ (pp. 276-279) という記事にふくまれているものである。同じく無署名ではあるが、内容から推して、資料 I. の執筆者と同じ人が書いたとおもわれる。この記事は、マカオの言語事情をあつかったもので、一種の書評といえる。とりあげられているのは、二冊の語彙集。ひとつは、34ページから成るもので、1200以上の用例(主としてポルトガル語)をふくんでおり、同一の音は同一の漢字を用いるというやり方で、発音もしめされている。残念ながら、記事の中では、その漢字を割愛し、読者(ヨーロッパ人、とりわけ、イギリス人やアメリカ人)に便利のように音声転写されている。もうひとつは、英語の語彙集で、わずか16ページ。ふくまれている単語も400たらずと、前のものにくらべれば貧弱である。なお、*hap-pe-chun* という発音形式が、*Occupied* の意味をもっていることが記されている。

これらふたつの語彙集が、いつ出版されたか、この記事は述べていないけれども、「我々は、最近まで、こういう単語集が発行されていたことに気付かずにきた」(p. 276)とあるところからみて、相当以前に世に出ていたと考えてさしつかえないだろう。

### 資料 III.

すでに何度も言及している、Berncastle の著書に収められているものである(1851: II. p. 66)。ただし、正確に記述しようという気持ちは、かれになかったようである。資料的価値はとぼしい。

#### 資料 IV.

雑誌 *Household Words* の第15巻(1857)に掲載された、無署名の記事‘Canton-English’に収められているものである。執筆者の言によれば、マカオの中国人のバザールでの、靴屋とのやりとりとのこと。なお、ここで外国人とあるのは、執筆者自身ではなく、一緒にバザールに出向いた、この地にしばらく住んでいるアメリカ人である。

なお、この記事によれば、1842年以来、南京条約によって開かれた、中国沿岸の他の港にも、このわけのわからないことば(gibberish)がひろまったとのこと。アヘン戦争に敗れるまで、周知のように、清は外国貿易をカントン一港に制限していた(1757年以後)。

#### 資料 V.

年代的に前後することになるが、この資料が、いままであげた資料のなかではもっとも古いものである。Noble (1762) の記述したものであるが、ここに引用したのは、Prick van Wely (1912) にもとづいて、Hall (1944) が転写したものである。ところで、Prick van Wely は、この Noble の記述を引用することによって、「ピジン英語」は、1747—48年頃までに十分確立されていたと主張している。この主張の是非について論ずることはさけるが、私としては、大筋において、この主張は認められると考えている。

資料の紹介をすませたところで、さて、本題に入ることにする。

## II-A

資料 I. における意味は、「こと」と解せる。ここでは、‘troub pidgeon’ と二語に書かれているが、前述の *Household Words* の記事では、‘business, pigeon; trouble, trouppigeon’ となっており、一語に融合したうえ、意味は、英語の ‘trouble’ にあたるとされている。機能的には接尾辞に似ており、しだいに、独自の積極的な意味を失っていったようにみえる。

資料 II. には, ‘Occupied’ という意味で用いられる表現として ‘hap-pe-chun’ というかたちがあげられている。執筆者は, これに ‘have pidgeon or business’ と注記している。したがって, ‘pidgeon’ の意味には, ‘business’ と言いかえることができる以上, さきほどの「こと」という意味だけでなく, 「仕事」といった, より積極的な意味もあったことになる。

こうして, 1830年代なかばの ‘pidgeon’ ということばについては, 「(いろいろの) こと」と, 「仕事」, あるいはもっと具体的に, ‘pidgeon’ ということばを用いる, その話し手に特有の「仕事」と, とりあえず, 二様の定義が可能とおもわれる。

Berncastle の資料は, 本人が, ‘pigeon’ は ‘business’ に由来すると考えているだけあって, 二様の定義のうち, 後者がよくあてはまるようにみえる。しかし, 見方をかえれば, 「こと」という意味も妥当しそうである。ことに4番めの例など, そうである。資料 I. に ‘What thing’ という表現がみえるが, ‘thing’ の意味のうち, 「こと」と解せる場合は, この ‘What pigeon’ という表現にとってかわられたともみなせよう。また, ‘my pigeon’ という表現における ‘pigeon’ は, 「仕事」とも解せるが, 私にかかわりある「こと」とも解せる。

資料 IV. における ‘too muchee pigeon’ は, 「忙しすぎて」と解せる。もちろん, 片づけなければならぬ「仕事」がたくさんあるから「忙しい」わけである。この解釈は, ‘hap-pe-chun’ の意味とそれほどへだたっていない。

このようにみえてくると, 意味の面にかんしては, O.E.D. の規定を妥当なものとして評価できよう。上にあげた用例のうち, もっとも古いとおもわれるのは, ‘hap-pe-chun’ であるが, そこにおいて, ‘pe-chun’ の意味を ‘business’ にむすびつけることができ, そのうえ, この ‘pe-chun’ は, 「なすべきこと」, 「したいこと」とも解すことができ, 「こと」としか解せないような用例とも無縁ではない。これは, おそらく, ‘business’ が当時もちえた, ひろい意味・用法とも符合するであろう。

したがって, 「ビジネス説」に立てば, 「ピジン」が ‘business’ の意味をもつのは必然であり, かりに, 「ビジネス説」に異を唱えるにしても, 当時, 結

果として、「ビジン」が‘business’の意味をもっていたことは否定できないのである。

しかし、意味の類似性が明らかになったからといって、それで「ビジネス説」が正しい説ということにはならない。つぎに問題となるのは、したがって、音声面の変化を十分に説明できるかどうかということである。

## II-B

意味の問題をあつかったとき、より古い資料に出てくる‘*pe-chun*’を、‘*pidgeon*’より、より古い意味をしめすものと考えた。それは、「仕事」から「こと」への意味の発展の方が、その逆より考えやすかったからでもある。しかし、発音の面にかんしてはどうであろうか。可能性をまず列挙しよう。

i) かつては、カントンにおいても、‘*pe-chun*’であり、それがマカオに伝わった。のちに、カントンでは、‘*pidgeon*’となった。

ii) かつても当時も、カントンでは、‘*pidgeon*’であり、それがマカオに伝えられて‘*pe-chun*’となった。

iii) かつても当時も、マカオでは、‘*pe-chun*’であり、それがカントんに伝えられて‘*pidgeon*’となった。

iv) かつては、マカオにおいても、‘*pidgeon*’であり、それがカントんに伝わった。のちに、マカオでは、‘*pe-chun*’となった。

v) ある語がほぼ同時に、カントンでは、‘*pidgeon*’となり、マカオでは、‘*pe-chun*’となった。

以上のうち、「ビジネス説」に有利とおもわれるのは、ii) である。i) と iii) の難点は、カントンで、‘*pe-chun*’から‘*pidgeon*’に変化したと考えにくいのである。カントンにおける語彙や音形の変化は、いずれも「英語化」の一環である。とすれば、すでに [b] (さらには、[v]) の発音に成功しているカントン人が、‘*pidgeon*’の語頭の [p] を放置しておくわけがないのである。iii), iv), v) の難点は、英語の‘business’にむすびつける以上、マカオをカントンと同等以上の地位に置いて考えることは困難だということである。また、かりに、v) の難点は相対的に小さいとしても、‘business’と‘pidgeon’

の関係は、ii) とかわらない。なお、さらに、i) の難点についてつけくわえるなら、'business' から 'pe-chun' への変化を説明しようとおもえば、[d]3] > [t] の変化に言及しなくてはならない。ならば、'pidgeon' から 'pe-chun' へ変化したと考えた方が、「ビジネス説」にとっては都合がいいことになる。したがって、ii) の可能性に立脚するのが、もっとも有利になる。

さて、'business' から 'pidgeon' への変化だが、難点がふたつある。ひとつは、語尾の脱落（[-s] におわる語尾がいつも脱落するとは限らないから。すでに18世紀初頭から記録に残っている 'joss' の例がある）をどのように説明するか。もうひとつは、かりに [\*pizin] となったとして、[z] > [d]3] をどう説明するか。後者は、資料 II. の、'casa' を使えば、何とか説明はできそうだが、必しもすっきりしない。マカオの、それもポルトガル語の例を使わねばならないのだから。

このふたつの難点は、十分に克服されているとはいいいがたい。そのうえ、さきにも述べた「英語化」の問題がここにもある。[b] の発音がほぼ達成されているのに、'pidgeon' の語頭の [p] になぜ「揺れ」の形跡すらみえないのか<sup>4)</sup>。考えられることは、中国人の側に、'pidgeon' = 'business' という関係が成立していなかった（「ビジネス説」の観点からは、成立しなくなった）ということである。問題は、したがって、この関係はそもそもの最初から成立していなかった（この場合、「ビジネス説」は、一種の folk-etymology<sup>5)</sup> としての意義しかもたないことになる）のか、途中から成立しなくなったのかどちらであるか、ということになる。これは、「ビジネス説」の最大の拠り所である、意味の類似性が、「ピジン」という語の歩みの途中において生じたものか、その起源とともに生じていたものか、どちらであるか、という問題でもある。もし「ビジネス説」に異を唱えようというのであれば、前回の「ピジャン説」がそうであったように、この点を突破口にせざるをえない。その場合、「仕事」とか「こと」とかいう意味につきあたる、一段階前の意味を模索することになる。

「ビジネス説」は、これを主張する研究者がいない。そのために、'pidgin' は、'business' の訛った語というだけで、どのように訛ったのか、他の例に照

らしあわせて説明されることがなかった。本稿における説明は、解明にはほど遠い。さらに多くの資料と周到な分析とを必要としよう。

また、この当時のピジン英語には、比較的、英語化を蒙っていないものがある。‘pidgeon’もそのひとつだが、ほかに、中国語や、ポルトガル語など、英語以外の言語に由来するとおもわれる語のうち、使用頻度の大きなものが、やはり英語化をまぬかれている。‘chin chin’, ‘joss’などが、その代表的なものである。これらは、イギリス人など外国人も多用しており、その結果、中国人に、これ以上改変する必要のないかたちと受けとられていたふしがある。あるいは、‘pidgeon’もその種の語彙のひとつだったかもしれない。しかし、Berncastle は、この語は、中国人のよく用いる語としており<sup>(3)</sup>、事実、外国人が実際にこの語を口にすることを記録したのは、資料4(1857)が最初のような。残念ながら、資料的には裏づけられない。

また、これも資料的裏づけを欠く推定だが、中国人の側に ‘pidgeon’=‘pigeon (「鳩」)’ という解釈が成立していた可能性もあろう。この場合、英語化が問題にならないことはいうまでもない。ちなみにこの解釈は、何ら新しいものではなく、19世紀後半、すでに存在していたものである<sup>(4)</sup>。さらに、資料の I. 及び II. の執筆者の、‘pidgeon’ という綴り方もあわせ考えてみるべきであらう。かれは、音価を忠実に反映させようとする一方で、語源意識をも破壊しないよう気を配っている。その点、‘pidgeon’ は、その両方(とりわけ後者)に対する配慮に欠けるところがある。O.E.D. は、「ピジン」に対して、年代は不明であるが、‘pidjin’, ‘pidjun’ という綴りのあったことを教えている。そう考えると、「鳩」という意味には一言も言及していないが、この執筆者の心のどこかに ‘pigeon (「鳩」)’ のことがあったのでは、とおもわれてくる。

最後に、こじつけに類する「つくり話」で「ビジネス説」の紹介を了えることにしよう。

‘pigeon’ に今少しこだわることにする。まず、資料 V. の最後の例を、「あんな、大女欲しい、小女欲しい？」とでも訳しておこう。‘hōla’ は、‘whore’ の転で「売春婦」のことである。また、O.E.D. によれば、‘pigeon’ には、「鳩」のほかに「若い女」とか「恋人」という意味があり、16世紀末頃の例が

あがっている。遠路はるばる中国へやって来た水夫らにとって、上陸そうそう女を買おうとしても不思議はない。「一夜妻」を ‘pigeon’ と呼ぶうち、いつしか「女を買う交渉」とか、女との「値段の交渉」を指して、‘pigeon’ というようになった。ちなみに、現在の広東語の「娼」はイェール式表記法で ‘cheung’ となる。[tj‘œ:ŋ]<sup>(6)</sup>のごとく発音される。これが、授与動詞の「俾」(‘béi’[pei]<sup>(6)</sup>、これは [pi] と聞かれうる) とむすびつくようなことがあれば、少しはこの話もおもしろくなるだろう<sup>(6)</sup>。(なお、‘pidgin’ を中国語に由来するとする説としては、「俾錢」説がある。いずれあらためて紹介することになろう。)

## (注)

- (1) ‘have’ にたいする、‘hap’, ‘hab’, ‘hav’, あるいは、‘sabee’ にたいする、‘japi’, ‘sabi’, ‘savi’ などをみよ。
- (2) 実際は、‘business’ に由来しているのではないのだが、意味の類似性、関連性、さらには、中国人は [b] を発音できないという知識、あるいは体験などにもとづいて、「ピジン」を ‘business’ に由来すると解釈したことになる。
- (3) 『一橋研究』、第6巻第3号、1981年、拙稿の注(2)をみよ。
- (4) C. Leland (1876: 74)。L. Todd (1974) が、Leland の著書から、‘pigeon (「鳩」)’ に掛けた詩を引用している (P. 23)。
- (5) 綴字と発音の表記法は、中島幹起 (昭和56年) にしたがう。[pei] を [pi] と聞かれうるとしたのは、私見による。
- (6) しかし、水夫が女を欲したのは、何も中国には限らない、という当然の事実も忘れてはならないだろう。

## 資料 I.

I walked into another shop; and after saluting the shopman, asked him if he had any news.

‘Velly few,’ said he; ‘you have hear that gov’nor hab catchee die? last day he hab die!’

‘Yes, my hab hear; just now which si your partner have go? Two time before my come, no hab see he,’ I inquired.

‘Just now he go country; stop two day more he come back,’ answered he.

‘Before time, I have see one small boy stay this shop; he have go country?’ said I.

'He catchee chowchow; come one hour so; you wantchee see he?' asked he.

'Maskee; you have alla same; before time my have catchee one lacker-ware box, that boy have sendee go my house, no have sendee one chop?' I inquired.

'Sitop litty time; I sendee call-um he come,' said a man sitting by me, who was smoking a pipe very sedately.

'Well, more soon, more better; sendee chop-chop,' I told him. 'This have what thing?' said I, taking up two or three red incense sticks, smoking under the table.

'That hab joss-tick; China custom makee chin-chin joss,' replied the man behind the counter. A noise in the street called all hands out of doors to see what was the matter. They soon returned, and he with the pipe observed, 'that have number one kweisi man; he makee too muchee cow-cow; that have counter very troub pidgeon.'

'What thing he do makee so much bobbery?' asked I.

'Oh, hab he insi one shop, makee steal; any man must wantchee he go that mandarin,' answered he.

'So fashion, eh;' said I. 'What casion so much a man, so muchee noise,' I asked him, looking through the door at a noisy procession going by.

'Some man have catchee one wifo; to-day have counter good day, can mally velly proper.'

By this time, the boy came in, and I procured the chop or passport for the article I had purchased, and returned home.

## 資料 II.

〈マカオのポルトガル語の例〉

*Imperador*, emperor, is sounded, *in-pe-la-taw-loo*.

*Agora*, now, is sounded, *a-ko-lãp*.

*Gente*, a man, is sounded, *yen-tik*.

*Casa*, a house, is sounded, *kak-tsze*.

*Carta*, a letter, is sounded, *keet-ta*.

*Dentro*, within, is sounded, *teen-too-loo*.

〈マカオの英語の例〉

*Tael* is pronounced *te*.

*Jacket* is expressed by *tik-ka*.

*Alike* is expressed by *a-loo-sum*, intended for all the same.

*To sell* is expressed by *say-lum*, or *sell'em*.

*Commonly* by *so-so*.

To exchange by *cheen-che*, or change.  
 To want by *kah-le*, probably derived from the Portuguese *querer*.  
 A clothes-seam devil is expressed by *tay-le-mun*, or tailor man.  
 The devil of the kitchen is a *kok-mun*, or cook.  
 An account is *kan-ta*, or counter.  
 A husband is *hah-sze-mun*.  
 A wife is *wi-foo*.  
 A beggar is not inaptly rendered by *kum-sha-mun*, or *kum-shaw-man*.  
 Unclean is *tah-te*, or dirty.  
 To call is *kah-lum*, or call'em.  
 The earth is *kaw-lang*, or ground.  
 Distant is translated by *lang-wi*, or long way.  
 Please is rendered by *chin-chin*.  
 To set is *sheet-tum*, or sit down.  
 Great is rendered *kah-lan-te* from the Portuguese *grande*, which is an evidence that the same person is author of both works.  
 Leisure is *hap-teem*, or have time.  
 Whither is *kwut-yu-ko*, or what you go?  
 To enter is *ko-yeen-si*, or go inside.  
 Occupied is *hap-pe-chun*, or have pidgeon or business.  
 Presently come is *tik-lik-ke-kum*, or directly come.  
 Not understand is *no-sha-pe*, *não saber*, or not know.  
 Orange is *loo-lan-che*, like the Portuguese *laranja*.  
 Gentlemen's sons is translated *meet-che-mun*, or midshipman.

### 資料 III.

A Chinaman will tell you,  
 It is not my pigeon.  
 I no savez that pigeon!  
 I made no good pigeon.  
 What pigeon you want done? &c.

### 資料 IV.

CANTON-ENGLISH.  
 Foreigner.....Chin-chin fookkee?  
 Chinaman.....Belly well, belly well. Chin-chin: whafo my no hab see tai-pan sot langim?

- F.……My wanchee wun pay soo belly soon. Spose fookkee too muchee pigeon: no can maykee.
- C.……Cando cando: whafo no can: no cazion feeloo: my sabbee belly well: can fixee alla popa.
- F.……Wanchee maykee numba wun ledda: feeloo no hab eulop ledda?
- C.……No cazion feeloo. Can skure hab numba wun popa ledda.
- F.……Patchee wun piece sulek insigh alla popa: wanchee finis chopchop: can do?
- C.……Can see, can sabbee: skure you day afoo mollo: taipan can sen wun piece cooly come my sop look see.
- F.……(seeing a woman in the back part of the shop) High ya, fookkee: my see insigh wun piece wifoo. Dat you wifoo? My no sabbee fookkee hab catchee wifoo. Tooloo?
- C.……So fashion tooloo. Beefo tim wun moon, countee alla popa day, my catch dat piece wifoo.
- F.……My chin-chin you, fookkee. Chin-chin.
- C.……Ah chin-chin, taipan, chin-chin.

## 資料 V.

1. *áj mójki hánsəm fēs fō hí.*
2. *áj mójki grándi cíncin fō hí.*
3. *hí nó kári cájna-mén gós, hóp átər gós.*
4. *jú kári grándi hóla, pikinini hóla?*

## 参考文献

(最少限のものにとどめる。なお\*印を付した文献は、本稿執筆にあたって、直接、手にとって参照することのできなかったもの。)

Berncastle, *A Voyage to China*, 2 vols, London, 1851.

Anon., 'Canton-English', *Household Words*, 15(1857): 450-452.

Anon., 'Gaoumun fan yu tsã tze tesuen taou, or A complete collection of the miscellaneous words used in the foreign language of Macao. 2. Hung-maou mae mae tung yung kwei hwa, or those words of the devilish language of the red-bristled people commonly used in buying and selling', *Chinese Repository*, 6(1837): 276-279.

H.A. Giles, *A glossary of reference on subjects connected with the Far East*, 3rd ed, Shanghai, 1900.

R.A. Hall, Jr., 'Chinese Pidgin English: grammar and texts', *Journal of*

*the American Oriental Society*, 64(1944) : 95-113.

Anon., 'Jargon spoken at Canton: how it originated and has grown into use; mode in which the Chinese learn English; examples of the language in common use between foreigners and Chinese', *Chinese Repository*, 4 (1836) : 428-435.

\* C. Leland, *Pidgin English Sing-Song*, London, 1876.

中島幹起『広東語四週間』, 大学書林, 1981年

\* C.F. Noble, *A Voyage to the East Indies in 1747 and 1748*……London, 1762

Oxford English Dictionary, London, 1961.

\* F.P.H. Prick van Wely, 'Das Alter des Pidgin-Englisch', *Englische Studien*, 44(1912) : 298-299.

L. Todd, *Pidgins and Creoles*, London, 1974.

(筆者の住所: 国分寺市光町3-27-14)